

クルト・ケプルナー著

『戦争の国への旅 — ユーゴスラビアでの一外国人の体験』  
抄訳（2）

元 吉 瑞 枝

☆原著は次の通りである。

Kurt Köpruner: *Reisen in das Land der Kriege*

— Erlebnisse eines Fremden in Jugoslawien —

Überarbeitete Neuausgabe: Diederichs im Heinrich Hugendubel Verlag,  
Kreuzlingen/München 2003.

本号に掲載するのは、本稿・前号（本誌第10巻第2号所収）の目次概観で「<II>クロアチアでの戦争—1991年から1995年まで」と分類されたブロックのうち、前号につづく箇所（原著44頁から62頁まで）のほぼ全訳である。前号と同様、核となる章題は★で、その下位におかれた章題は\*で示した。今号では、訳者による要約にあたる箇所は、前後を【 】で示した一箇所（68頁）のみで、それ以外は原文の全文訳である。なお、文中の語に付した〔 〕は、訳者による補足説明である。

oo

\*ツープ — あるいは、ダルマチアの水晶の夜

>>前号のつづき<<

ツープが語ってくれたところによれば、次のようなことが起こった。

ザダールの郊外で、一人のセルビア人を逮捕するために警官隊が出動したが、その際にクロアチア人の警官が一人撃たれた。しばらくして、およそ100名から成る群衆がザダールの中心部およびその周辺の116個のセルビア人の商店や住居を10時間にわたって(!)破壊し続けた。その行動はきわめてシステマティックになされたもので、その都度、攻撃者の一団は道路の交通を閉鎖した上で、セルビア人に関わりのあるものすべてを粉々に打ち砕き、終

いには略奪し火を放った、ということである。

これらのことはすべて警察の眼前で行われたというばかりではなく、警察は、このような行動に協力さえしていた、という。ツーペは、これらの行動の全体を初めから終わりまで、警察の無線で傍受した。その行動が始まったときは、それが、これまでもしばしばあったように、誰か或る特定のセルビア人に対してなされたものだ、彼はまだ思っていたのだった、が、やがて、それが、ザダールのすべてのセルビア人の店主に向けられた明らかに計画的な攻撃だったことがわかったのである。

「私は、暴徒たちが丁度そのときどこにいるか、つねに正確に把握していました。彼らが街の中心に近づいて来れば来るほど、私には、次は私のオフィスがやられることは明らかだと思えてきました。AVISの本社がベオグラードにあり、私がセルビア人であることは、この地の誰もが知っていることです。けれどもセルビア人であるとはどういうことなのでしょう？ 私の先祖は、数百年前から、ここダルマチアに住んでいます。私はユーゴスラビア人<sup>(1)</sup>で、妻はクロアチア人であり、私の三人の姉妹たちは皆、いわゆるクロアチア人と結婚しているのです。」 彼にはもう逃げるしかなかった。「これがなかったら」と、彼は、立派な無線機を指さしながら言った。「私も彼らに襲われて殴り殺されていたことでしょう。」 また彼は私に、コンピューターや文書類や、その他、彼と同僚と一緒に救い出した物も、誇りをこめて指し示して見せた。

私はツーペに言った。この国で起こった多くのことについて、私もこの間、あり得ることだと思えるようになってはいるが、それでも、そんなことはあり得るはずがない、もし本当にそんなことがあったのなら、テレビで私たちのところまで届いていたはずだし、せめて一つぐらいの新聞の少なくとも小さな記事で読んでいたはずだ、だってユーゴスラビアで起ったセンセーショナルな事件については毎日たくさん報道されていたのだから……それなのに100以上の商店が破壊され、しかも警察が、このような一日中つづいた騒動を阻止しなかったというようなことがあったなんて、全く信じられないことだ、と。ツーペは立腹して、突然笑い出した。「あなたたちの新聞には、セルビア人は豚だっていうことしか載ってないですからね。」当地の人たちは、クロアチアの新聞で、ドイツやオーストリアの新聞記事のコピーを逐語訳つきで読むことができるのである。「私は毎日RTLや他のテレビ局のものも見ています。それで、あなたたちが我々についてどう思っているか、私は正確に知っていますよ。あなたたちは、ここで何が起っているのか、何もわ

かっちゃいないんです。」

彼の机の上には、新聞が山積みになっていた。彼はその中をひっかき回して一枚を取り出し、それを私の鼻先に突きつけて言った。「さあ、これを読んでみてください。ここには嘘が書かれているというだけではないのです—あなたはイタリア語がわかりますか。」私は、わからないというほかなかったが、それがイタリアの新聞—おそらく『コリエレ デラ セラ』—の記事であることはわかった。そこでは明らかにザダールのことが扱われていて、「水晶の夜」という言葉がドイツ語でも書かれているのが読み取れた。「もしあなたが、現実はどうだったのか、を見たいと思うなら、私と一緒に来て下さい。あなたにそれをお見せしましょう。」私は直ちにこの申し出に従った。

私たちはツーペの車で出かけた。スネジャナを街で下ろした後は、矢継ぎ早に多くのことに出くわした。数時間、ツーペは車で、合間には車を下りて徒歩で、ひどい瓦礫と化した地を私に次々と見せてまわった。私はカメラを持って来なかったことを悔やんだ。洋装店、パン屋、肉屋、新聞の売店、煙草屋、宝石店、事務所、理髪店等々—それらは、一戸建ての建物だったり、ブリキでできた小さな小屋のようなものだったり、或いは、カラ・ラルガ<sup>(2)</sup>にあるような、アパートの一階の通路ないしアーケードに入っているような商店だった。そのうちのいくつかは、昨日ヨシプと散歩した時にすでに見ていたものだった。が、私はいま初めて、あのときヨシプが私に何を見せようとしていたのかを理解したのだった。私は次第に、「水晶の夜」という表現が大げさだとは思えなくなってきた。当時、1938年11月に大ドイツ帝国の諸都市で起こったことも、おおよそこのようなものであったにちがいない。

もちろんツーペは絶えず、すべてを、ぞっとするようなディテールも添えて、私に注釈し、彼の見解を述べた。それは結局、ヨシプのものと本質的に変わるものではない、特に要点においては。すなわち、戦争は避けられず、かつ恐るべきものになるというのである。彼自身は当地を離れない、なぜならベオグラードの本社がそう望んでいるからであり、また自分がどこへ行くべきかわからないからである。クロアチア人の妻は子供たちを連れて、数週間前からプーラにいる姉のところにいる。「教えていただけませんか、私は家族と一緒にどこへ行けばいいのか、ここにずっと住みつづけられるのか、彼らが夜やってきて家が爆破されたらどうしたらいいのか、警察を呼ぶのか。」

ツーペと一緒に見てまわったこの行程は、私には強烈な体験だった。これらすべてをもし自分の眼で見なかったとしたら、こんなことは決してあり得

ないと思ったことだろう。瓦礫の山から山へと歩いていきながら、私はずっと自問していた。いったいなぜスネジャナは私に、このことについて何も話してくれなかったのか、と。彼女がこれを見逃していたなどということはありえない。彼女は私に、ザダールの日常のまさに不条理な事柄についてたくさん話してくれていたではないか。それなのにこのことについてはただの一語も語らなかったのだ。ここ数カ月彼女と交わしたたくさんの電話等による会話を、私はいま思い出していたが、それは、矛盾し、混乱した印象を与えるものだった。しばしば彼女はすっかり投げやりになってしまったように話したが、その数分後には、笑いながらすべてを違った言い方で表現し直そうとした。そしてそんな時は、いつも口癖のように言ったものだ、「ねえ、いい？ 私も、もう既に少しおかしいのよ、時々はね」と。

今度こそ彼女から本当のことを聞き出そう、と、私は決心した。なにしろ私たちは、6歳になったばかりの私の娘ヴェラも連れて、7月にはこのおかしい人々のところで休暇を過ごそうと計画しているのだから。その計画は、大変なリスクを伴うものになっていくように、私にはだんだん思えてきた。

私とその日の午後まだ早い時間にスネジャナと落ち合ったとき、彼女は私にすぐに言った。「いま、あなたはきっと私から釈明を聞きたいと思っているのでしょね。」 彼女は明らかに、私が彼女に質問を浴びせるだろうと予感していた。まさにその通り、私は釈明を望んでおり、いわゆる「水晶の夜」について彼女が知っていることすべてについて、彼女はそれをどのように体験したのか、なぜこれまでそれについて私に話さなかったのか、今すぐに聞きたいと主張した。

本格的な尋問のようなやりとりの中で、次のことが明らかになった。

数週間前の或る日、彼女の11歳の娘アテナが住居に駆け込んできて、セルビア人の店が全部壊された、と喚いた。彼女たちはすぐに、大通りに面している窓ぎわに走っていった。当時スネジャナの家族が6階に住んでいた大きな建物のある通りは、リエカとスプリットを結ぶ幹線道路とザダールの中心部をつなぐ広い道路であった。窓からスネジャナが見たのは、彼女の住居の下をあちこち走り回る無数の人々だった。幾人かは、金属製の棒や他の道具で武装しており、また、制服を着た警官も何人かいた。丁度その瞬間は、どうやら或る理髪店の番のようだった。その店は、通りから引っ込んでいる路次にあったため、その現場は見えなかったが、大きな叫び声と打ち壊すときの物音で、何が起こっているのか明らかだった。窓ぎわに立って、見ていたというよりはむしろ聞いていた者は皆、体をこわばらせていた。その騒動は

かなり長く続いていたが、あえて通りへ出ていこうとする者は誰もいなかった。

あとでわかったところによれば — その行動は翌日以降、当然巷の話題になった — その攻撃部隊は、1991年5月1日の朝、ザダールから約8キロ離れた郊外のビビニエから列車でザダールに重装備で乗り込んできた。首謀者たちは、セルビア人の商店の住所を記したリストを携行しており、一行は直ちに最初の目的地へと進撃した。そこでは先ず警官が店に入って、そこにいる人々を全員外へ出した後、攻撃部隊が行動を開始し、すべてを粉碎した。その直後に群衆がやってきて、店内に残っている金目のものをすべて略奪した。その間に攻撃部隊の方はすでに、リストに記されている次の目標に向かっていった。

スネジャナは、この日、私にこのようなことすべてを話そうと電話したのは間違いなく、と断言した、けれども、言葉にならなかったのだ、と。実際、私の方でも、彼女がレーゲンスブルクへ電話してきたときに、一、二分、何かを口ごもりながら喘ぐように言い、結局電話を切ってしまったことがあったのを思い出した。当時、私には、彼女が電話で話すのに支障があるのか否か、彼女が笑っているのか泣いているのか、わかっていなかったのだ。けれどもすぐ次の日に彼女は私にもう一度電話してきた。すっかり元のままの彼女に戻って、「昨日は悪い日だったのよ」と笑って、彼女のお決まりのセリフ「万事OK、これから何もかもうまくいくわよ」と言った。いま分かったのは、あのとき彼女は私に心配させたくなかったのだし、またあのことを何とかして追い払いたく、もうあのことを考えたくはなかったのだ、ということだった。その上、私は、彼女がザダールで起こったその種の愚かなことを語るたび、信じられないという反応をしょっちゅうしていたのだから。「正直に答えて！ もし私があ的事件のことをあなたに話したとしても、あなたは私の言うことを信じてくれたでしょうか？」

しかし私には、そのとき自分がどういう気持ちがあったらろうか、答えることができない。「途方に暮れた」というのが、おそらく最も適切を言葉だろう。この地の人々は、見かけ上は全く普通に暮らし、話し、笑い、喫茶店にも行く。子供たちは走りまわっている。半年前から私は、この国について報道されていることをすべてチェックし、また、ほとんど毎日のようにスネジャナとコンタクトをとっている。それなのに、この地で現実に行っていることについて何もわかっていなかったのだ、と、いま認めざるをえない。私はもう一度確認しておかねばならない。すべては、1991年5月、戦争が始まる

数カ月前に起こったことだったのだ、と。

\* マリアーあるいは、窓辺の蠟燭<sup>ろうそく</sup>

午後、私たちは、スネジャナのかつての仕事仲間で長年の友人であるマリアを訪ねた。彼女は夫のボランおよび二人の子供たちと一緒に、同じ通りのすぐ近くに住んでいた。マリアは、非常に知的な強い女性で、貿易業に携わっている「純血のクロアチア女性」であり、ドイツ語、英語、イタリア語を完璧に話せた。このあとの数年間、彼女は、ザダールにおける私の最も重要な「情報提供者」となった。なぜなら彼女は、すぐれて政治的な思考をし、冷静かつ正確な、また包括的かつ信ずるに足る報告ができたからであり、とりわけそれが共感のもてるものだったからである。(およそ2年前に彼女は亡くなったが、私たちは彼女と最後まで、とてもよい関係をもつことができた。)ボランは、彼の自己紹介によれば、ユーゴスラビアで可能なあらゆるものが混じり合った存在だった。彼の祖父の一人はクロアチア人で、もう一人はセルビア人であり、祖母の一人は、私の記憶が正しければモンテネグロ人で、もう一人はボスニア出身である。彼は数週間前に失業したが、その理由は露骨に、会社は今後純粋なクロアチア人のみしか雇えなくなったというものであった。しかしともかく彼の上司は、彼を追放することを気の毒に思っていたのだ。

私たちの会話は当然、上述の事件をめぐるものとなった。マリアとボランの話は、基本的に、私がこの間この事件について持つにいたった像が正しいことを確証してくれたが、なおそれにたくさんの重苦しいディテールをつけ加えるものだった。

その一つは、ここで語るに値するものだと思われる。ザダールではあの日の夕方、すべての行為が終わったあとで、ラジオや強力な口コミで、ビビニエで撃たれたクロアチアの警官をその夜ザダールの街を挙げて追悼しなければならぬという声が広まった。各人は、夜、暗くなったら家にとどまり、件の警官と自由なクロアチアのために祈りを捧げ、喪のしるしに、すべての窓辺やバルコニーに蠟燭を灯して置いておくように、と言われた。それは、あのテロ行為を承認する証<sup>あかし</sup>をどの家族からも求めようとするものであり、同時に、あのような犯罪に賛成したくない人たちすべてに対して警告しようというものだったのだ、と、マリアは言った。

その晩、電話ががががががかってきた。友人や隣人たちは、ドアの呼び鈴

を鳴らした。マリアは電話に釘付けとなった。或る人たちは電話で、どうか是非とも蠟燭を立てるようにと強く促してきた。こんなことは全部、冗談でやってることじゃなくて、今後トラブルを起こしそうな人たちを調べるため、言ってみれば、少数派を確認するための特殊な形なのだ、これに加わらない者は、みずからクロアチア民族の敵だと明言しているのだし、おそらく敵と手を結んでいるのだろう、そして、そんな敵たちがどういう目に遭うかは、今日、街のみんなが見た通りだ、と言い、別の人たちは電話で、こんなことは、人々に支持されない卑劣なやりかただ、と抗議の声を伝えてきて、自分たちを孤立させないようにと訴えてきた。そしてまるで陰謀でも企てているかのように、電話口で、誰がこんなこといっさいに加わっていないか、誰が誰にまだ電話すべきか、について、名前のリスト全体についてとことん話し合われたとのことである。

マリアとボランは最初から、一本の蠟燭も灯さないと決心していた。このような狂気の沙汰には同調できない、と……けれどもプレッシャーは凄まじいものだった。マリアの母は何度も電話してきて、マリアが蠟燭を灯すのを拒否すると、電話口で泣きわめき、荒れ狂った。この夜、たまたま電話口で話していたとか階段室で隣人と話し合っていたとかいう人以外は誰でも、窓辺に立って隣の家々をじっと見つめていた。至るところで蠟燭が灯り、その数はますます増えていった。通りをパトロールし、窓を調べ、階数を数えている監視隊の姿も見られた。彼らは、蠟燭を灯していない窓の向こうに住んでいるのは誰なのかを後で確認するためであろうが、メモもとっていた。その間に友人たちは再度電話してきて、わずか1時間前に昂然と語った市民的勇気を撤回し、弱々しい声で、いまは蠟燭を灯している、と打ち明けた。

その後、マリアの母が突然やってきた。鼻息荒く怒りながら、腕に一包みの蠟燭を抱えて……「彼女は私に大声で、お前なんか今すぐベオグラードへ行ってしまえ、でもその前に子供たちを殺してから行け、と怒鳴りちらした。それでうちでも蠟燭が灯ることになってしまったんだ。ほくは義母をとめることができなかった、そんなことをしようとしたら、子供たちの前で彼女を殴り殺さざるをえなかっただろうからね」と、ボランは私にとっても恥ずかしそうに語った。「あれから僕はセルビア人の友人たちの顔をまともに見れないんだよ。僕は彼らを見捨てたんだからね。」

>> 次章、略。以下、要約 <<

【マリアとボランから聞き、自分でも体験したクロアチアの状況。メディアは、多民族の平和的な共存を願うユーゴスラビア的な理念を信じている人たちにいっそう圧力をかけ、第二次大戦時のウスタシャを思わせるようなクロアチア的なものを美化する傾向が強まっていき、テレビではしょっちゅうツジマン<sup>(3)</sup>の映像が流され、またクロアチア軍の兵士が「セルビア人の血が飛び散るのを見たい」と叫んで、クロアチアに住むセルビア人たちを不安に陥れている。しかしこのような流れに対して距離をおいて健闘しているメディアも少数ながらあった。『スロボドナ ダルマチア』（日刊紙）、『ダナス』（週刊誌）、『ユーテル』（テレビ局）である。

またマリアとボランからは、著者が当地を訪れる約二週間前の1991年5月19日に行われた、クロアチアの独立を問う選挙の様子についても聞いた。その選挙では、約92%の得票率で、ユーゴ連邦からのクロアチアの独立が支持されたが、その実態は、クロアチアのナショナリストによる投票所での露骨な監視の中で投票が行われたというものだった。これについて著者は、情報が一面的にならないよう、政治的立場の異なる多くの人たちからも聞いてまわったが、同様の報告だった。驚くべきことは、この選挙について、西側のメディアがその実態を報道しなかったばかりか、これをクロアチア民族の勝利として讃えたことである。】

>> 以下、再び全訳 <<

\*アリフーあるいは、クロアチアに住む或るムスリム<sup>(4)</sup>の話

同じ日の夕方、私たちは、スネジャナの親友の家へ、茸料理の食事に招待されていた。アイーダは、建築技師で、スネジャナとはもう幼稚園の時から親しい友達だった。「純血のクロアチア人」である。それに対して、彼女の夫のアリフはムスリムで、社会学者であり、そして特に私の好奇心をそそったのは、彼が、ザダールの、正確には、ザダールの空港のあるゼムニクの軍事大学の講師として軍務に就いていることだった。私が興味を抱いたのは、この軍隊〔連邦軍〕について嫌悪の念を催させるような事柄がわれわれの国で当時すでに伝えられていたからであり、なかでも、連邦軍は完全にセルビアが支配しており、セルビア人たちが自分たちの抑圧的な政権を正当化し得



ている決定的な責任は連邦軍にある、と言われていたからである。何度か私はスネジャナに、連邦軍について質問したが、彼女も私に決して正確に答えることができなかつた。そんなとき彼女は絶えずアリフのことを持ち出し、彼が茸狩りの名人であるだけではなくて、彼女が知っている中でも最も偉大なヒューマニストだと言うのだった。

その彼、ユーゴスラビア連邦軍のムスリム人将校がいま私の前に立っていた！ 堂々たる体躯の若者で、ちょうど、クロアチアのテニスのスター選手であるイバニセビッチのようなタイプだ。あいにく彼は、外国語はただロシア語しか話せないのも、私は彼とは第三者の助けを借りることなしには会話できなかつた。彼は、意地悪い言い方をすれば、主人の忠実な従者という感じであり、好意的に言えば、自分の雇用主であるJNAと呼ばれているユーゴスラビア連邦軍に対して、確信を伴った忠誠心に溢れていた。彼によれば、それは、世界で一番民主的な軍隊であり、ユーゴスラビアの各々の民族グループがどういう基準でさまざまな将校の位階に就くべきかということが、チトーの時代からの厳しい大綱により定められている。どんな決定も、厳密に同等の権利を有する委員会を下される。このJNAが他国を攻撃することなど決してないだろう、軍のすべての機構は、自国の防衛のためのものである、とのことだった。

批判のこもった私の質問に対して、彼は、忍耐と思いやりをもって答え、その答えを説得力のある論拠で固めた。連邦軍に対して私がこれまでに持っていたイメージについては、何ひとつ認めなかつた。にもかかわらず、疑念は残った。それは決して、私が彼を信頼しなかつたからではなく—彼は、自分が語ったことについては本当にそう思っていたのだ—、ただ、我々西側諸国のメディアが毎日報じていることが、私が現地で見ずから見たことのまさに正反対であるなどということがあり得るなんて、いまだに信じられなかつたからである。

私はその後、アリフにはもうあまり会うことはなくなつたが、彼のことはよく考えた。彼はあの晩、気付かれぬようにしてはいたが、彼が、そして五人の家族全員もきわめてデリケートな状態、より適切な表現に言い直せば、完全に絶望的な状態にあることが、気配で感じとれた。もし、クロアチアが独立国家であるとされるなら、アリフの軍は、その日から必然的にクロアチアでの占領軍となるのだろうか？ もし相互に紛争や撃ち合いや本格的な戦争にでもなつたらどうなるのか。夕方家族の許に帰り、次の日にはまた兵舎に戻っていくのか。そして、彼がこれまでの人生を共に過ごしてきた人たち

を撃たねばならないのか。もし連邦軍が立ち去るとしたら、どうなるのか。軍と一緒にセルビアへ行くことになるのだろうか。

この男が連邦軍に惚れ込んでいたこと、それは明らかだった。だからといって、彼がセルビアへ行ってどうするということか。セルビアには、知っている人間は一人もいない。ザダールは、長年住みついた彼の故郷であり、この故郷にも彼は惚れ込んでいた。同様に、クロアチア人の妻のアイダにも、また、半分ムスリム、半分クロアチア人の魅力的な子供たちにも。軍から脱走すべきだろうか。ムスリムである彼が、カトリックのクロアチアの軍隊に志願する、そんなことができるだろうか。

もちろん私は、アリフの場合も、ムスリムであるということがどういう意味かを理解しようと努めた。アリフは無神論者、それも確信に満ちた、おまけに博識の無神論者であった。生涯で一度も、アラーに向かってであれ、他の神に向かってであれ、祈ったことはない。それならなぜムスリムなのか？

「私の父はムスリムだった。私はこの伝統を継いでいる。」それは毎日の生活の中でどんなふうに表されているのか、との私の問いに対しては、「全然、何もない！」と、期待外れの簡潔な答えが返ってきた。

\* 「クロアチア軍はボスニアでは戦闘行為をしていない」

アリフがその後どうなったか、について、私はここで先取りして記しておきたい。クロアチアでの戦争は、1991年8月、すなわち私が彼と出会ってからおよそ2ヵ月半後に始まった。アリフは連邦軍から脱走したのだ！容易に想像がつくように、大変苦しい内面的な葛藤を経たあとでのことである。彼は、強いプレッシャーに曝され、他にどんな選択肢もなかったことから、クロアチアの領土防衛の徴募に応募し、採用された。クロアチア軍がザダールの連邦軍の兵舎、すなわち彼のかつての仕事場や長年の同僚たちを射撃し、兵糧攻めにしたとき、彼はおそらくその場において、その行為に加わっていたのだろう。

私がアリフに二度目に会ったとき—それはおよそ1年後のことだった—、戦火は既にボスニアにも燃え広がっていた。国連は、その少し前に、セルビアあるいは「ユーゴスラビアの残り」に対して制裁を課していた。しかもその理由は、ユーゴ連邦軍が、ボスニア内のセルビア人たちと組んで、従って全世界から承認された他国の領土で、戦闘行為をしているからというものであった。ボスニアにはクロアチア軍も出動していることが絶えず報じられて

いたにもかかわらず、クロアチアに対しては、制裁決議はなされなかった。尤もツジマンは、ボスニアへのクロアチア軍の出動を断固として否認し、アメリカの衛星偵察機もそれを確認できないとしていた。そのためクロアチアは制裁を受けずに済んだのだ。このような一面性は、その後の悲惨な展開を招くことに大きく寄与した、西側の致命的な罪過の一つである。

このような状況の中で私がアリフに会う少し前に、私はすでに別の知人たちから、彼がずっとボスニアに進撃した部隊の中において、筆舌しがたい大量殺戮に関わっていたことを聞いていた。アリフは天才的なアマチュア写真家で、クロアチア軍での自分のした仕事を何もかも写真に収めていた。それらの写真は、切り裂かれた体、切り落とされた子供の頭、えぐり取られた目などなど、想像を絶するような残虐なものだった。それらの写真—全然なかったとされているクロアチア軍のボスニア進攻の証拠—を、私自身は見えてはいないが、それが存在することを私はいささかも疑ってはいない。

アリフは、全く別人になっていた。いかめしい制服を身につけ、石のようにこわばった顔つきで、彼は私の前に現れた。彼は私の目を一度もまともに見なかったように思う。「いや、クロアチア軍はボスニアでは戦っていない」と、彼は私に説明した。「しかし、軍は我々に、ボスニアにいるムスリムの同胞を助けることは許可している。それで我々はそうしているし、しなければならぬのだ、あのセルビアの気違いじみた殺戮者どもに対して……きっと、クロアチア人の兵士も我々を助けてくれるだろう。しかし、それは全く自発的なものであり、政府の指示によってボスニアで戦っているクロアチア軍兵士は一人もいない。」

私は、彼のこんな明らかにナンセンスな言明に対して、議論はしないでおいた。彼の話したことは、まさしく指示された公式通りのものだったからだ。ついでながら記しておく、それからわずか数週間後に、ツジマン大統領は、ボスニアにおけるクロアチアの武力行使を誇らしく公言した。もし私がこれまでに、いわゆる洗脳のようなことをくぐり抜けてきた人間に出会ったことがあるとしたら、それはアリフにほかならない。少し前までユーゴ人民軍〔連邦軍〕の熱狂的な支持者であった彼が、いまは、他人に対して、またとりわけ自らに対して、クロアチア人たちと同じように反ユーゴ的に振る舞うことで、自分の寝返りを正当化することができるなんて、予想もできないことだった。私たちの会話は、長くは続かなかった。彼はどっちみち私に何も言っただけとはいけないのだし、スネジャナも私にほとんど何も通訳してはくれなかった。私は、この二人を二人きりにしておいた。一時間後に私が戻ってき

た時、スネジャナはまだアリフのそばに座っていたが、泣いていた。現在に至るまで、彼女は私に、彼がああとき彼女に何を話したのか言ってはくれない。

彼がその後どうなったかについて、ここで手短かに語っておきたい。彼は、真正のクロアチア人であるとはいえないとして、クロアチア軍を解雇された。彼の中で、きわめて短い期間のあいだに二回、世界が崩壊した。ムスリムである彼は、ダルマチア地方において、他の仕事を得る機会もなかった。家族全員がとてつもない嫌がらせを受けたのでザダールを離れ、比較的自由的な雰囲気のあるリエカに移ったが、そこでも将来の見通しはほとんどなかった。私たちは、しばらくの間アリフをドイツへ呼ぼうと画策した。周知のように、ドイツには1990年代半ばに大勢のムスリムの亡命者がいて、彼らのために、いくつかの教育措置と称するものが実施されていた。そういう場に入れば、アリフのような男はきっと有意義な仕事をするのができただろう。だが、私たちは実際には何も実現できなかった。

その間、彼自身は、写真家として身を立てようと試みた。私は、『苦悩の歳月—ザダール1991年から1994年まで』というドイツ語のタイトルのついた、実に高い費用をかけて作られた写真集を段ボール一箱分、今も持っている。この本には、アリフの撮った100以上の写真が収められており、それらはすべて戦争の被害を物語る貴重なドキュメントである。ただそれに付された文章の方は、残念ながら教えられるところが少なく、またそれ以上に客観性にも乏しい。

1996年以来、彼の一家はニュージーランドに住んでいる。アイダはクロアチアの名門の出で、いずれ立派な不動産を相続することになっていたとはいえ、クロアチアにおいては、彼らに未来はなかったのだ。スネジャナは今も、電話や手紙でアイダと連絡を取り合っている。アリフはもう2回も心筋梗塞を起こしたが、それ以外には、彼らはもう完全にその地に根を下ろしている。地球の反対側のその地では、もしかしたら、国籍というものがそれほど重要ではないのかもしれない。

#### ★「プリヤトノ」—あるいは、或る言葉の誕生

さてもう一度、私の最初のザダール滞在の時に話を戻そう。このときの日々のあらゆる憂鬱な体験と並んで、まだ一つ、私がここで語っておきたい、或

る小さな事柄が心に浮かぶ。それは、一見、気分転換になりそうな無害なことだが、私が味わった当地の雰囲気と大いに関連する意味のあることだった。

ザダールの非常に有名な会社SAS<sup>(5)</sup>での仕事関係の会食のとき—私はザダールで単に恐ろしい話を聞いてまわっていただけではなく、自分の会社のためのビジネスもしていたのだ—、私は招待主たちに、自分が彼らの言語を既にいかに「うまく」使いこなせているかを見せようとした。それで私は、ドイツ語の「いただきます」と同じ意味の「ブリヤトノ」という言葉を心から言うことで、食事を始めようとした。私はこれまでも似たような機会に、この言葉や他のいくつかの断片的なセルボ・クロアチア語で、相手の嬉しそうな反応をしばしば引き出してきた。ところが今度は、私は、自分が何か間違ったことを言ってしまったのだと、すぐに感じとった。数秒間沈黙が続いたあとで、招待主の社長が丁寧に説明してくれた。「あなたが誰と一緒にいるのかを、お気にとめて下さい！『ブリヤトノ』はセルビア語なのです。セルビア人には警戒して下さい。私たちのところでは『ドバル テク』と言うのですよ」と。

その後私のお気に入りのテーマの一つとなった言語の問題に私が初めて直面したのは、この時だった。周知の通り、人々はユーゴスラビアの広い地域でセルボ・クロアチア語を話してきた。もちろん多くの方言はあった。こうして、ダルマチア人とザグレブ出身の人間との区別は簡単にできる。ベオグラードで話されるセルボ・クロアチア語はそのいずれとも違っているが、ザグレブ方言とベオグラード方言の違いは、ダルマチア人が特に強調するように、ダルマチア方言とザグレブ方言の違いよりは小さいのだ。けれども全体として、私がこのことについて無数の人たちに尋ねたあとで得た印象では、セルボ・クロアチ語の方言間の違いは、たとえばフォアールベルク方言<sup>(6)</sup>とチロル方言の違いほど大きくはなく、いずれにしてもドイツ語とスイス・ドイツ語の違いよりはずっと小さなものであるように思える。

たしかに、書き言葉にもいくつかの小さな違いがあるし、またもちろん、セルビアではキリル文字で、クロアチアではラテン文字で書く。ついでながらクロアチアに住むセルビア人も、都市ではラテン文字を使う。私はまだ一度も、ザダールや、クロアチアの他の場所で、キリル文字で書かれた言葉に出会ったことがない。

これまでどうであったにせよ、クロアチアでは当時、新しい言語を育て上げることに着手し始めていた。そして今なお、そのことに熱心である。多くの人々が今なお使いこなせないでいる、完全に新しい単語が作り出されたり、

新しい言語規則が導入されたりした。クロアチアの熱狂的な愛国者でさえ、このことについては、素晴らしい機知に富んだ座興の種を提供して皆を笑わせている。

私は、言語学者も含めて多くのクロアチア人たちと、このテーマについて話した。この種のクロアチア語については、彼らは肩をすくめただけで、これがそんなに恐ろしいことだとは気づいていなかった。「でもクロアチア語とセルビア語は、原則として、同じ言語の中の二つの方言なのではないでしょうか？」と、私はある時、学識のあるクロアチア人に尋ねた。彼は建築家で、ドイツ語と英語が完璧にできた。「ええ、たしかにそうです。けれどもそのことは、両言語の起源の近さを何ら意味するものではありません。世界には、起源を辿ってみると、互いに二つの完全に異なる言語として遠く離れていたであろうと思われるような方言もあるのです。たとえば、クロアチア語とセルビア語の場合もそれにあたります」と、彼は熱意をこめて答えた。私は真面目な表情で尋ねた。「それじゃあ、クロアチア語は、たとえば中国語がドイツ語から隔たっているよりももっと、セルビア語から遠く離れているのですかね？」と。また、それなら彼が私の問い（「セルビア語とクロアチア語は同じ言語の中の二つの方言なのではないか」）に対して最初に「ええ、たしかに」と応答したのは、その時彼が何を言おうとしたにせよ、いったい何を本気で肯定したのだったか、とも。

ところで今日でもザグレブでは、他の点では根っからのクロアチア人であるという人でも、つい口が滑って「プリヤトノ」と言ってしまうのにしょっちゅう出くわすことがある。私にとっては、それは、とても参考になる。それ以来、私はこの「プリヤトノ」という言葉を、当初「レッドスター」の勝利がそうだったように、立場のわからないクロアチア人と同席した場合には常に行う「ナショナリスト・テスト」と自分で称していたものの基準として使ってみた。遅かれ早かれ、誰とであれ知り合った人とは一緒にレストランに行くことになり、そうすれば私の無邪気な「プリヤトノ」に対して、たくさんの異なるニュアンスの反応が返ってくることになり、私は、それによって、対面している相手が民族的寛容さの点でどんな人物であるかを、かすかにでも感じとることができる。

ザダールでの私の二度目の滞在 — 二度目も決して退屈なものではなかった — について語る前にもう一つ、私が（最初の滞在の）これらの日々に、セルビア人に対するクロアチア人の深い憎しみやあからさまな攻撃の理由が何であるかを、メディアの煽動であるという以外に、私にも了解できるよう

な体験を何一つしなかったのかという問題について触れておきたい。私は自分が全くどちらにも与していないと感じており、ユーゴスラビア人が皆同じくユーゴスラビア人であるとはされないことに、今なお心を悩ませていた。おそらく〔私の故郷の〕フォアールベルクでの数百のユーゴスラビア友好フェスティバルが今も脳裏に強く焼き付いているのだろう。私はただ、このような憎しみの背後に潜んでいる現実的な要因は何かを知りたいと思った。そのためどんな会話も、私には、実地調査の使命を帯びたようなものになった。その際に私は、「木は一本だけでは十字架にはならない〔一方から見ていただけでは完全な認識は得られない〕」という原理から出発した。両者から等距離を保つという点では、私には何の問題もなかった。

私は、周りにいる人には誰にでも尋ねまくった。その中にはもちろん、ただひたすらクロアチアの独立を待ち焦がれている人々も、少なからずいたし、また、露骨で短気な人間もいた。しかしながら、このような人達が私に説明してくれたことは、あまり稔りのあるものではなかった。あからさまな人種主義的な言説—たとえば「セルビア人は皆、豚だ」という類の—は別にすれば、主として、些細なことに思えるような諸々の歴史的、宗教的な理由が挙げられた。たとえば、クロアチア人はそもそもスラブ人ではなく、実際はペルシャの地を起源とする、とか、クロアチアは、1000年も続いた非常に古い王国であり、中世のカトリック圏ヨーロッパに帰属していた、それに対してセルビアは、数百年のあいだトルコの支配下にあったため、東ヨーロッパ的、さらにはアジア的でさえある、等々。

これらはどれも、相手を攻撃する理由の現実的な説明には全然なっていないので、もうそれだけでも不十分なものだったが、その上、私が見聞きした狂信的な攻撃が先ず特にこの地に住んでいるセルビア人に向けられたものであり、その祖先というのは大多数もう数世紀前からこの地域に定住し、みずからを「純粋な」クロアチア人とみなしている人々と全く同様に、オスマントルコ的なものからの影響をあまり受けていないのであるから、なおさら理由にはなっていないのである。

\* 「人種論」小論 —または、99.9% クロアチア人、なのにセルビア人

そもそも「純血」という言葉は、当地では、二重の意味で括弧つきである。私が見聞きしたところによれば、ザダールやクロアチアの他の地域でも、この言葉に当てはまる人は誰もいないと主張しても過言だとは思えない。もし

セルビア人とクロアチア人が異なる「人種」として分類されるのであれば……よく引用される例だが、ツジマン〔大統領〕の娘婿は「セルビア人」である。私は、狂信的なクロアチア人と話している時はいつも、彼の先祖の系譜について聞き出せるように話を仕向けていき、「純血」なんてないのだということをおくまで主張し続けた。

私が前にマリアのことを「純粋なクロアチア人」と書いたのは、ただ彼女の父も母もいわゆるクロアチアの家族の出であるという意味にすぎない。しかし家族は、父親がクロアチア人でありさえすれば、クロアチアの家族とみなされるのである。だから、もしマリアの祖母が二人とも「純粋なセルビア人」であったとしても、彼女は「純粋なクロアチア人」とみなされるのだ。どんなに遺伝上は「半セルビア人」であったとしても。それともひょっとして遺伝的にも「半セルビア人」なんかではないとでもいうのだろうか？ そもそもセルビア人とクロアチア人を区別することがどんなに混乱したナンセンスなことか、ここからも見てとれるのである。

また「民族の基準」としてしばしば言われる信教の違いも、それほど我々を啓発してくれるものではない。たしかに一般的には、クロアチア人は伝統的にカトリックであると言えるし、私も、正教徒であると名乗ったクロアチア人とは出会ったことがないが、非常に多くのクロアチア人が全く宗教的ではない—それどころか多くの人々は断固とした無神論者である—ことは別にしても、クロアチアに住むセルビア人たちのあいだにも、洗礼を受けたカトリック教徒、そればかりか〔実際に日曜日に教会に行くような〕行動的なカトリック教徒さえ存在しているのである。

スネジャナの前夫ネナトを採り上げてみよう。彼の母親はイタリア人であるが、彼はセルビア人とされている。が、彼は、洗礼を受けたカトリック教徒であり、彼の兄弟姉妹達も全員そうである。

そのような「カトリック教徒のセルビア人」は大勢いる。それは何にもまして、1941年から44年にかけてのウスタシャの政府の公式プログラムに由来するものである。それは、ウスタシャ統治下の当時のクロアチアに住んでいた約200万人のセルビア人のうち、3分の1を殺戮し、他の3分の1を追放し、残りの3分の1に対してカトリックへの改宗を強制するというものであった。そのプログラムは、周知の通り、大ドイツ帝国の総指揮のもとに広範囲にわたって実行されたものである。

当時自動拳銃を背中に突きつけられてカトリックの洗礼を受けた多くの正教徒のセルビア人で、洗礼のあとも生きのびた者は—「改宗」の直後に射



殺された者も少なくなかった—、その後、名前も変え、それ以来「純粋な」クロアチア人と見なされている。というのも、名前—〔姓だけではなく〕ファウストネームについても—が最終的に、クロアチア人とセルビア人を区別するのに、まだ或る程度使える唯一の指標とされているからである。但し、それも非常に限られている。

私には、どれがセルビア人の名前であり、どれがクロアチア人の名前かは、いまだにわからない。けれども私とスネジャナと一緒に彼らの名前を聞いたときなど、スネジャナには、その都度すぐにわかる。たとえばテレビで、多くのスラブ系の選手もチームの中に入っているドイツのサッカーのブンデス・リーグの試合を見ているとき、これらの「何とかイッチ」という選手がどの民族に属しているのか、たとえば、ドラゴスラヴィッチは—何だろう？—セルビア？ ノー！その名前はクロアチア系であり、ストイコヴィッチはセルビア、ボビッチはクロアチア、ステパノヴィッチはセルビアなのである。とはいえ、どちらの民族にもあり得るような名前もまた多く、事はそれほど簡単ではない。

ミロシェヴィッチ、そう、あのミロシェヴィッチは、どちらにもある名前である。ペトロヴィッチは、もともとはモンテネグロの名前であるが、他の多くの州にも広がっている。そんな場合には、〔姓ではなく〕ファウストネームの方が役に立つが、それにも規則性はない。イヴァン—何だろう、セルビア？ ノー！、イヴァンはクロアチアの名前である。アレクサンダーはセルビア、ペタルはどちらでもあり得る。

その体系は私には、それについて数時間に及ぶレクチュアを受けたにもかかわらず、理解できないままである。また体系なんてないのだ。次のような次第なのに、どうして体系なんてあり得るだろうか。たとえばセルビア人の男性がクロアチア女性と結婚し、二人が彼女の両親の許へ、従ってクロアチアの家族圏に入っていくなら、〔前述の原則に反して〕彼らの子孫はクロアチア人となるのだ。こんな例には事欠かない。

それでも基本的には、前述のように、名前がまだ民族を識別する最良の指標となる。そしてそれは数世紀来、父系により継承されてきた。「混血の関係」であっても—幸いなことに—何の関係もない。そこで容易に想像できるのは、理論的には、現在「セルビア人」とされている人でも、十世代遡ってみれば、「血統的には」99.9%まで「クロアチア人」であり得ること、しかも彼の理髪店があつた「ダルマチアの水晶の夜」に〔クロアチア人の手によって〕壊されたということもあり得るということなのだ。

>>以下、次号に続く<<

〔訳注〕

- 1) チトー統治下の旧ユーゴスラビアで、エスニックな民族を越える新たなユーゴ統合の概念として、1961年の国勢調査から正式に導入された名称。それ以来、異なる民族の両親のもとに生まれた子供たちなどにより、「ユーゴスラビア人」としての帰属意識が育っていったが、同時に、民族主義に対する抵抗からこの語を意識的に用いる人々もいた。
- 2) ザダル旧市街の中心部にある区域。狭い路次に小さな商店が並んでいる。
- 3) 当時のクロアチア共和国大統領。1990年に就任して以来、民族主義を唱導。91年6月にユーゴスラビア連邦からの独立を宣言し、内戦となったが、92年1月、EC（当時）により、独立を認められた。クロアチア内のセルビア人は、「クライナ・セルビア人共和国」を創設して対抗したが、それに対して、94年、95年に電撃作戦を展開、同地を武力制圧した（本稿・前号の注20参照）。99年12月死去。
- 4) ムスリム人は、ユーゴスラビアにおいて（歴史的にオスマントルコの支配以降）イスラム系の文化や宗教の流れを継承する人々の総称で、セルビア人、クロアチア人と並んで、同地における主要三民族の一つ。前号の注12参照。
- 5) 工作機械を製造するクロアチアの会社。
- 6) フォアアールベルクは、オーストリアの最西部、スイスとの国境の近くにある州で、著者の生まれ故郷。前号の本文67頁参照。